

2026年9月6日（日）第569回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」NPO活動報告：国内外の災害支援と地域教育の成果

対談レポート：グラウンドワーク三島

現場の哲学と次世代への継承

渡辺豊博氏が語る、災害支援の真髄と三島での環境教育の実践

🕒 「直接支援」の哲学とネパールの実態

支援の行動指針
募金送金に留まらず、自ら現金を運び市場で資材を直接調達・配布する。
✓ 10人規模の医師団を組織
✓ トラック・バスを現地レンタル

氷河湖決壊の現実
温暖化によるリスクを20年前から警告。政治的背景による被害実態の不透明さを指摘。
ネパール政府環境アドバイザーとして
標高4600mでのヘリ調査を実施

日本への具体的提言

60m超の「深井戸」を各集落に
💡 太陽光発電+ポンプ
地震に強い水源インフラと自営電力をセットで整備すべき。

三島・源兵衛川の「出前授業」

全21校巡回

📖 子供たちに根付く「川の倫理」
魚を持ち帰ることを「殺す行為」と理解し、キャッチアンドリリースを自然に実践。
📖 知識の「口伝」
川の危険箇所や再生の歴史が、先輩から後輩へと現場遊びを通じて継承されている。

教育がもたらす人間の成長

💡 「現場体験は前頭葉を刺激し、想像力を解放する。川の活動が芸術的な感性を引き出し、最高の作品を生むきっかけになる。」
👤 見1学1 + 小学生から大学生、通信制高校生まで幅広く展開

⚠️ 防災パラダイムの転換

従来の避難訓練
「逃げる」
大規模災害では移動不能の恐れ

これからの防災
「逃げなくて済む」
耐震・インフラの防災化を徹底

過去の教訓を活かす仕組み作りが急務

今後の課題

📌 ネパール災害募金活動の開始
@ 渡辺豊博
📌 市内全21校への出前授業継続
@ 渡辺豊博
🕒 次回授業予定: 調整中

本対談では、近年の国内外における大規模災害（ネパール、熊本など）に対する NPO 法人グラウンドワーク三島の直接支援活動とその哲学、および三島市内の小学校で行われている環境教育「出前授業」の具体的な成果と子供たちの意識の高まりについて、専務理事の渡辺豊博氏が詳細に語る。

ネパールでの災害と過去の支援活動の経験

近年のネパールで発生した大規模な土石流災害に触れ、それを機に渡辺氏が過去十数年にわたりネパールで実施してきた支援活動が詳述された。

渡辺氏は、氷河の崩落が引き金となった、今回の洪水により数千人から1万人規模の犠牲者が出ている可能性に言及しつつ、政治的な思惑からか中国側とネパール側で発表される被害者数に大きな隔たりがあり、実態が見えにくい状況を指摘した。

渡辺氏の支援は、単に募金を集めて送金する形式ではなく、自ら現金を現地に運び、市場で直接資材を購入して被災地へ届ける「直接支援」を哲学としている。

このスタイルは、ネパール地震の際に 1,000 万円を集め、3 回にわたり 300 万円以上を現地へ持参し、資材購入やトラック、バスのレンタルに充てた経験に基づいている。また、現地の国立病院と連携し、産婦人科医を含む 10 人規模の医師団を組織して薬を配布するなど、医療支援も直接的に行ってきた。

こうした長年の活動が評価され、渡辺氏はネパール政府の環境アドバイザーに就任。国会議員への講演や、国内最高学府であるトリブバン大学での講義も担当した。

環境アドバイザーとして、過去には標高 4600 メートルにある氷河湖（セシメ湖）の決壊リスクを調査するため、ヘリコプターで現地に赴いた経験もある。

20 年以上前から地球温暖化を背景に専門家たちが警告していた氷河湖決壊のリスクが現実のものとなった現状に対し、事前のリスクマネジメントの欠如が被害を拡大させたと分析した。

日本の災害対策への提言：熊本の事例から

ネパールでの経験を踏まえ、日本の災害対策における課題が指摘された。

特に、過去に大地震を経験しているにもかかわらず、熊本で同様の問題が繰り返されている現状を批判的に言及した。「水の都」と称される熊本で、地震発生時に水が不足する事態は、事前の対策が不十分であることの証左だと語る。

具体的な対策として、地震の影響を受けにくい 60 メートル以上の「深井戸」の設置を強く提言。

20 メートルより浅い「浅井戸」は地震時に汚染や崩壊のリスクが高いのに対し、深井戸の水は水質も良好で、沸騰させれば飲用可能である。

各集落の集会所などに深井戸を 1 本掘り、太陽光発電とポンプを組み合わせた自家発電システムを導入すれば、災害時の水源を確保できると主張した。

また、震度 7 を超えるような大規模災害では、体が浮き上がるほどの揺れで「逃げることはほぼ不可能」であり、避難訓練だけでなく、「逃げなくても済む」ための事前の備え（耐震性のある家、インフラの防災化）がより重要であると強調。

10 年前の教訓が活かされず、深井戸の設置や避難所の備え（段ボールベッドや冷暖房など）が進んでいない現状に警鐘を鳴らした。

三島での環境教育「出前授業」の成果と子供たちの意識

話題は、NPO 法人グラウンドワーク三島が、市内の小中学校で展開している環境教育「出前授業」へと移った。

2026 年 9 月 3 日に行われた三島市立西小学校 4 年生向けの授業「源兵衛川物語」でのエピソードを中心に、その成果が具体的に報告された。

この活動は、市内の全 21 小中学校を巡る計画の一環であり、パワーポイントを駆使して、源兵衛川が再生された歴史を伝えている。

渡辺氏は、授業中の子供たちの反応に深く感動したと語る。

「川を綺麗にしたのは誰か」という問いに、児童全員が「グラウンドワーク三島」と即答。

さらに、「捕まえた魚をどうするか」という問いには、ごく自然に「キャッチ・アンド・リリースをします」との答えが返ってきた。

児童たちは、魚を持ち帰ると水道水で死んでしまう「殺す行為」だと理解しており、市外から来た人が魚を持ち帰ろうとしたら、その理由を説明して注意するとまで話したという。

また、川の危険な場所に関する知識が、ジャンボさん（渡辺氏）から教わった先輩を通じて後輩へと「口伝」で受け継がれていることも判明。

子供たちが単なる知識としてではなく、現場での遊びを通じて実感として自然を理解し、大切にする意識が根付いている様子が生き生きと語られた。

教育がもたらす感動と現場体験の重要性

環境出前授業での子供たちの熱量と高い理解力に触発され、教育の力と現場体験の価値について考察が深められた。

渡辺氏は、川でのゴミ拾いや自然とのふれあいといった現場体験が、人間の前頭葉を刺激し、想像力を解放する重要な要素であると指摘。

その一例として、アルバイトスタッフの門倉氏が、川での活動を通じて芸術的感性が刺激され、創作活動において「最高の作品」を生み出したエピソードを紹介した。

授業では、児童から「現場体験だけでなく論理的な勉強も必要だ」という非常に高い視座の意見も出され、教える側の大人自身が子供たちから学ぶことも多いと語られた。

この経験から、大人の自己満足に陥らないためにも、活動の成果を現場で子供たちの反応を通して確認することの重要性を再認識したという。

また、都留文科大学の学生や通信制の「こころ未来高等学校」の生徒など、多様な層に向けた教育活動も紹介。

最初は難しい話に壁を感じる生徒たちも、バイクの手入れといった現場体験を共有することで、徐々に理解が深まってくと述べた。

子供たちの鋭い感性に見透かされないよう、常にプレゼンテーションに新しい情報を盛り込み、新鮮で誠実な情報を伝え続けることの決意が語られた。